Forestry Basic Work

林業のキホン作業

林業の仕事を知る上で、基本的な流れとその内容を、昭和40年代のなつかしい写真入りで解説します。現在では、これらの諸作業は一部機械化され、より効率的に進められるようになりましたが、基本は変わりません。多くの先人の知恵と汗の結晶である林業のキホン作業をこの機会に見直してみましょう。

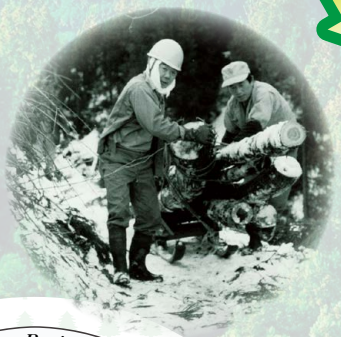
基本は昔も今も同じ、昭和40年代の写真で見る

間伐

植栽後20～30年程度経過すると、造林木（スギ）同士で競争が始まり、次第に優劣が付いてきます。「間伐」とは、劣勢のものを除去し優勢のものを残すことにより、主伐時に価値の高い林を作ることが目的。ただし、ある程度混みあった林を伐採する場合は、間伐従事者には高い技術が求められます。

主伐

林業の最終段階で、収穫とも言います。新潟県の人工林ではここまで80年程度かかります。写真（右）は、ブナの天然林伐採風景（架線集材）。



地拵え（じごしらえ）

植栽するための準備作業。スギ等の伐採跡地に残った枝葉等を集め、筋状に配置したり、火を入れて焼き払ったりして、植栽しやすい環境にするものです。

枝打ち

節のない優良な材を生産するために行いますが、効果としては雪害の防止や病虫害からの保護などの面もあり。樹皮むけを防ぐために、基本的には晩秋から冬期の生長休止期に実施します。

植栽

苗木を植える作業。植栽時には縄などを張り間隔をきれいに揃えます。苗木には土が付いておらず乾燥に弱いことから、植栽地に仮植（かしょく）し、植える分だけ掘り出して使います。

下刈

苗木を植えてから10年程度、毎年行う作業。草を刈らないでおくとスギに日光が当たらなくなるため、スギが小さい時は年2回行います。